

久保田(秋田)に入る

桃源郷を後にしたバードは、羽州街道沿いに北上し、神宮寺(神岡町)に到着したのが7月21日。羽州街道沿いには美しい山の景色が見られ、特に鳥海山「雪の円屋根」は印象深かったようです。

バードの疲れはひどく「低く暗く、悪臭のする汚い障子で仕切られた部屋しか見つからずここで日曜日を過ごすのかと思うとゆううつであった」としています。

7月23日、神宮寺から平底船で雄物川を下り、新屋に到着しました。陸路でまる2日もかかる旅程を船では9時間、42マイルの船旅は、思いのほか快適だったようです。久保田では、親切な宿舎で、気

持ちのよい2階の部屋をあてがわれ、3日間の滞在をすこく忙しくまた非常に楽しく過ごしたようです。特に「西洋料理(おいしいピフステキと、すばらしいカレー、きゅうり、外国製の塩と辛子がついていた)を食べると「目がいきいきと輝く」様な気持ちになった」と、久々に食べた西洋料理は非常に喜びました。

「久保田は県の首都で、人口3万6千、純日本風の町で肥沃な地域であり、外国の影響を感じない大きな病院や役所などがある」と街並みにも興味を示しています。特に、立派な建物の師範学校は、教室の設備や実験器具、博物教室の説明器具など実に素晴らしい、「ガノーの物理学」が理科の教科書になっている点などに大きな感

久保田から矢立峠までの行程



- 1 久保田 2 湊町 3 中野村 4 一日市村
- 5 金光寺村 6 檜山村 7 鶴形村 8 荷上場村
- 9 小繫村 10 坊沢村 11 綴子村 12 岩瀬村
- 13 川口村 14 大館町 15 釈迦内村
- 16 白沢村 17 長走村 18 矢立峠

心を示しています。また「手織機」の絹織工場の見学では、産業界に新たに開かれた女子の仕事として「非常に重要であり、社会改革へ進む傾向が伺われた」ようでした。

イザペラ・バード 大館に向う

久保田を後にしたバードは「港祭り」の山車を見物しながら、深い「藍色」をした太平山や、新山(寒風山)、本山に守られた大きな「瀉」を左手に眺めながら、米代川流域へと進みました。それにつれ大雨となり、喜根、切石、小津奈木と、雨と泥と激流に、山越えも川越えも大変だったようです。津栗から先は、橋がみな流され、渡し場も通行できないことから、馬を雇い、馬子の好意により馬だけ単独で平底船に乗せ、水増ししている早口川、岩瀬川、持田川(山田川)を渡らせ、ついに米代川の3支流を歩いて渡ることができました。激流は白い泡を飛ばし、人夫達の肩や馬の荷物に降りかかるほどでした。多くの日本人が、外国人の思いきった行動に目を見張った様子が記述されています(翌明治12年12月餅田村、立花村間に餅田橋が架設されている)。

日本奥地紀行では「川口という美しい場所にある村に滞在したらどうかと言われたが、大館まで馬で行くことにした」と記述されています。しかし、川口村肝煎、小

林重右エ門「宅に、バードが宿泊した記録があるという話を耳にし、小林宅を訪ね確認したところ、数年前数人で、バードが宿泊している文書を確認したが、今はどこかに仕舞い忘れた」とのこと、見ることができず残念でした。

今度の大館市民劇場公演『矢立峠に虹が立つ』に登場する、川口村肝煎の娘「菊」は実在した女性であり、菊と結婚する白沢の青年も、実名は不明ですが「戒名」で残っています。

7月29日大館に着いたバードは、疲れた足を引きずりながら、宿を探さなければなりません。というのも、大雨で宿屋に足止めされた客で、どの旅館も満員となっていたためです。その状況の中で、警官に「旅券を見せろ」と不当な要求をされたり、ようやく見つけた旅館は、人の話声や騒音、芸者のかき鳴らす楽器の音などが騒がしく、さらにはふすまや障子に穴をあけてのぞかれるなど、相当閉口したようでした。大館で2泊の足止めとなりましたが、雨雲が去って太陽が輝き、山に囲まれた谷間は、くつきり美しく見えていたそうです。

この峠を背の讀みたい

大館から白沢に入ったバードはさらに長雨に悩まされ、白沢には



2日間足止めにされました。8月2日の正午、2頭の馬と3人の人足を連れ矢立峠へと出発したバード。「美しい景色であった。自然そのままの谷間で、多くの山の峰が側面から谷間に下りてきて、暗いピラミッド型の杉が茂り、実に絵のような眺めであった。これこそ真に日本の美観である。」著書のまま。いくつもある浅瀬は増水のため流れが速く、流されてきた大小の石や、根こそぎ倒された樹木に押し流され、道路や小さな橋はすべてなくなっていて、「どう進んでよいのか見当がつかない」と人足達も困惑する状態でした。「杉の深い森におおわれた暗く高い山の峰が私たちの前に立ちふさがってくると、私たちは新しい道路に出た。馬車も通れる広い道路で、立派な橋を渡って2つの峡谷を横切ると、すばらしい森の奥へ入って行く。ゆるやかな勾配の長いジグザグ道を登って矢立峠に出る。私は日本で今まで見たどの峠よりもこの峠を背の讀みたい。